

日本音楽小史

川越 守

A Sketch of the Introduction of Occidental Music to Japan.

KAWAGOE Mamoru

Abstract: At the beginning of the Meiji Era, the Japanese government started introducing Occidental music to the education system in Japan. In this sketch, I am going to report how Occidental music was initiated, digested and spread throughout Japanese society, focusing on the Meiji through Taisho periods, and up until the end of world war II.

—目次—

1、序	99
2、我国の古来からの音楽についての考え方	100
3、詩、詞について	100
4、日本の音楽、芸能について	101
5、幕末から明治にかけての我国の内外の状況について	103
6、日本の旋法と音階について	104
7、西洋音楽の我国への導入について	107
8、蓄音器とレコードについて	110
9、童謡から歌謡曲へ	111
10、後記	113
11、参考資料	113

1、序

これから記述することは、2008年7月12日、札幌市の「かでる2・7」で行われた日本歌謡学院の勉強会で生徒さん方にお話しした内容を中心に構成したものである。

このところ、カラオケが盛んであり、歌謡曲を歌う人達も沢山いるとのこと。歌うだけでなく自分の国の音楽の歴史を知っていてもよいのではないかと思つての話である。私なりの理解し得たことについての話しであるが、これに多少の資料から得たものを加え、推測や、考察を付け足して、終戦時迄のことを書いてみた。一応のことは分かるのではないか。

日本の音楽の歴史をしっかりと読みとることは簡単なことではない。資料自体が読みにくいのである。これでは一般的に日本人が自分の国のことについて知り得ないだろう。今、丁度、我国の歴史を

ふり返って見るのによい時期ではないのかと私は思って、このレポートを書いた。

実は古いことは、今、明治のことでさえよく分からないのが実体ではないのか。私の祖父は、富山県で慶応4年（1868年）に生まれた。明治20年前後に北海道に渡って来たという。昭和になって私は祖父と同じ家に住んだ。しかし、祖父がどのような少年時代を過ごしたか、又、北海道での生活がどのようなものであったのかを私は知らない。時々、昔話も聞いたことはあるが、それだけのことしか知らなかった。古を知る為には、人はそのことに関心を持たなければならないのである。当時、私はまだそれを持つだけの才覚は持っていなかったのである。今となつては残念なことではある。

ここには、急を用することなどは何も書いていない。要するに、私自身の日本音楽についての覚えのようなものが出来上つたのである。それに関心のある人の為には少しは、参考になるかも知れない。

2、我国の古来からの音楽についての考え方

今から、約2500年前と云つてよいのだろう、ギリシアでは哲学者ソクラテスが出る。中国では孔子が人の教育について考え、インドでは釈迦が仏教を開祖する。これらが、東西同じ年代だということが不思議である。

孔子は人間の教養は詩に興り、礼に立ち、楽に成ると云つた。このことは論語に書かれている。墨^{ボツ}家は、音楽はうるさくて、無用だ云つたとのこと。孔子の考えは、「孔子の礼楽」と云つて、我国の音楽界に対して、大きく影響したのである。

孔子は、儒学の創始者であり、四書五経の書物が残されている。これらは政治や、道徳の書であり、我国では、18世紀の終わりに本居宣長（1789年）によって解説されている。

中国からの書物で我国に入って来た一番早いものが、論語だ云う。このことは古事記にも書かれているとのこと。百済^{クダラ}の王仁^{ワニ}（中国人）が漢字千字文とともに応神天皇（第15代）に5世紀の初め、献上して日本に帰化した云う。いろいろないきさつがあつて日本へ来たのだから。当時の知識人がなんとか読めたのかどうか？江戸時代になって論語は武士階級に普及する。漢学の出発点になつたのである。

論語は、孔子の弟子達によって編集されたものだ云う。我国では明治の初め迄は重要な書物であつた。昭和20年の中学一年生の漢文の教科書にもシ、ノタマワク～とのつていた。儒学、宋子学は日本では重要な学問であつたのである。道徳、人格形成、学問の成就、これらはなくてはならないもので、今日も有用ではないのか。

孔子は30歳の時に音楽を聴き、感じて、いたく感動した云う。三ヶ月、肉を喰つたが味がしなかつた云う。このことが、音楽が人生にとって有益なものとして、我国でもその重要性が認識されたのであろう。多分、江戸時代に平和になつてこのことがいわれたのではないか？

3、詩、詞について

歌うことで人は、心を豊かにする。漢詩は吟ずるもの、詩吟というのがある。歌は、詩をメロディーにして、それを歌う。古の歌も節を付けて表現発表したか、この方が人にうたえる力が大きいと考へたようである。又、詩は自然に節がついたと見てよい。我国では、漢詩に対して、和歌が出来上つた。

万葉集

山部赤人 田子の浦ゆ、[↓]うちいでて見れば真白にぞ、富士のたかねに雪は降りける。

新古今集にのった時には、田子の浦に[↓]うち出してみれば[↓]白妙の、富士のたかねに雪はふりつつとなっている。鎌倉時代に藤原定家が、勝手に替えたのかも知れない。小倉山の百人一首も定家の選定である。実力者としての定家を知ることになるだろう。ただ、こういった詩があっても、今日の歌謡曲にはむかない。明治の初期になって、言文一致の運動がおこり、文章の言葉使いと言葉を一致させて初めて歌謡は成立することになる。

幕末迄は、文章は文語体であった。二葉亭四迷、尾崎紅葉などは話し言葉に近い文章作品を試みた。口語文が出来上がる。このことがあって誰もが書かれたことが分かるようになった。ここに言文一致の詩の世界が生まれる。歌謡曲の文芸が作られるようになったのである。日本には「やまとうた」が生まれた。とりあえず「詩に興こり」である。これは、誰が始めたのだろう。

万葉集にもどるが、大伴家持が自分の歌も含めて大量に歌を集めたものが、それである。大伴は奈良時代の歌人である。雄略天皇迄のうたを集めたという。(1～14巻)今日は、上巻下巻の小本ですべて印刷されている。

10世紀になって古今和歌集が編纂された。序文に、紀貫之は「ひとつ心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と書いている。我々は、三十一文字で何かを表現しようとした「やまとうた」を再認識してみよう。

突然、明治になるが、石川啄木は21歳(明治40年9月)のときに札幌で2週間を過ごしている。北門新報の校正係に雇われたという。その新聞に「秋風の記」というかこみ記事を書いて札幌を去った。彼は和歌の世界を生きたのである。明治45年、26歳でこの世を去った。啄木は、死んでから有名になった人である。著作品を世に出してくれたのは、金田一京助、土岐善麿といった人達であった。

札幌での和歌は、「しんとして巾廣き街の秋の夜の玉蜀黍の焼くるにほひよ」他である。私は依頼を受けて彼の和歌を3曲歌にした。座像を大通の3丁目の角においた時のものであるが、大衆的な歌にこしらえた。和歌が歌謡曲になるのはかなりむずかしいだろう。しかし、こういったものも見直して行けば、それなりのものが出来るのではないか。啄木のうたは、ひと頃「芸術歌曲」の詞にとりあげられていたが、これは、すこし無理があると思う。内容が内容なので、やはり歌謡としてうたわれるべきだろう。

4、日本の音楽、芸能について

さて、一つの芸術、芸能が繁栄する為には、需要が必要なのである。これによって、それらは磨かれて行くだろう。三十一文字は、声に出して歌っていたという。琴の伴奏というのもあったという。我国の歌謡曲のはじまりではある。

徳川の時代は平和の時代であるが、政策は芸能をいろいろと取締っていた。そして、農民の芸能は一段低いものとしてとり扱っていた。一般庶民の音楽はおもに、三味線によって行われていた。町方の上流はお琴、そして、尺八は法器として別格のものであった。一般人のさわれないものということである。三曲は琴、三味線、胡弓で行われていたのである。盲人の音楽家達はこれらで楽曲を作っていたのである。当時は、盲人に位を付けて保護していたというのだが、内容は分からない。検校、^{ケンギョウ}句当、^{コウトウ}総禄、^{ソウロク}座頭^{ザトウ}などである。歌や音楽があれば、踊ることも出来るだろう。

- ^{チウタ}地歌—今日も続けられている。地というのは大阪を指す。江戸時代、大阪の^{センバ}船場は武士達がお米をお金に替えたところで、藩を代表して米を各地から持って来て取引が行われていた。米は船で運ば

れ、商人達も沢山いて米をひきとったのである。いきおい、料亭も沢山出来、宴会も行われた。この座敷に演芸が出来ないはずがない。地唄が作曲され、伴奏は三味線であるということになる。柳川某なるものが作り出したということだが、舞もつけられ、芸者がおどる。座敷芸である。これは、京都にもって行かれて「京舞」となり今も続けられている。江戸では長唄となり、お座敷長唄が出来た。地唄は商人と武士達に支えられて発達して来たのである。演目は、武士にあうように能楽からとってきた。風格のあるものをと商人達が気をきかせたとのこと。唄と唄の間に間奏が入り、これは、器楽へと発展して行く。「手事^{テゴト}」と名付けられた。17世紀の人、琴の八橋^{ヤツハン}検校も、はじめは三味線からの出発だという。そして、琴にかわり、「六段の調べ」が作曲された。これは、西洋流に言えば、主題と変奏といった形式の器楽曲で、手事の発展したものである。

江戸へ地唄が来ると、長唄だの端唄、小唄が生まれて来る。皆、座敷での歌謡である。当時の音楽家達は、唄も歌えし、三味線、お琴と何でも出来なければならなかったのである。

さて、三味線だが、中国の三線^{サンシン}が琉球に入り、これが信長の頃に日本の堺の町に入ってくる。これは、琵琶^{ヒフ}の演奏家の手によって改良され、今日の三味線になったという。特に撥^{バチ}に工夫があったようである。この楽器は庶民の音楽にはなくてはならないものになった。音色に独特のものがある。民謡では撥で弦を叩く、胴を叩くというのだが、農民音楽のあらさはこれによるのだろう。幕府が農民音楽を程度の低いものとしたのはこの為なのか、この辺はよく分からない。我々は、この三味線音楽を知ってこそ江戸文化がよく分かると思うのだが、それにふれる機会はまったく少ない。今、中学校では、日本の音楽について生徒に知らせようとしているのだが、江戸時代の大人の遊びから生まれて来た音楽を知ることは容易ではない。三味線もただ弾けばよいわけではない。西洋音楽の導入によって、我々は自分の国の文化を少しなお去りにしてしまったように思う。例えば、歌謡曲だが、今は、カラオケという需要期に突入した。今日を見るに、特にきわだった「歌」がない。作り過ぎてしまったのか、出来ないのか。今後の歌謡界はどのようになって行くのだろう。NHKでは、「国楽」としての歌謡曲を生放送で一生懸命にやっている。今後は、カラオケファンによってこの文化は支えられて行くのだろうか。今日、皆で自国の文化について考えて行かなければならないのではないのか。

- 能楽一時代は少しさかのぼる。多分、一般的に多くの人達によって支えられているものではないが、今日、ちゃんと存続している。音楽をともなったお芝居というように思っていればよいのか。

室町時代の完成だが、けっして面白いものではない。武士の式楽、武士のたしなみということで、さらに動きのないものになっていったようである。

はじめは、中国からの猿楽^{サルガク}という曲芸にこやかましい音楽がついていたという。小屋掛けでの芝居もやっていたようでもある。猿楽、散楽、能楽とよばれていったが、この間の変化についてしっかりと分かったものが私の手元にはない。とにかく、動かないことの中に、人は洗練を求めたのである。

能楽は足利氏の幕府が室町で180年続くが、その中で完成された。これは演劇である。その中に楽器を使用した。鼓、竜笛、締太鼓、等を使用し、十分に耳を楽しませたのである。信長は、「人間50年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり。ひとたび生をうけ、滅せぬ者のあるべきか」という敦盛の一節を好んで謡い、舞ったという。足利幕府は、信長によって滅ぼされ、以後、我国は戦国の時代に入って行く。江戸時代になって平和となり、いろいろな芸能が花ひらいて行く。

- 歌舞伎—「かぶく」という変わったことをするという言葉から作られた文字である。これは、島根県の出雲大社の巫女の阿国が、念仏踊りをあみ出し、京都へ出て来て始まったという。川原での公演である。17世紀初めのこと。女たちだけの集団であったが、これが風俗をみだすとして、幕府からさしとめられ、男が女形をやるというのなら良いとされた。とにかく、おどりは続けられることになったが、結局、当時あった人形芝居の方向をとることになる。つまり、演劇化したのである。歌舞伎を支える下座音楽に義太夫がある。人形浄瑠璃の伴奏も同じだが、物語を一人の太夫が語って行くところが面白い。伴奏も、太三味線一つである。台本の内容は、悲劇であり、これを演出する為に声を絞り込む。外国人には聞きたいものではないのか。しかし、この歌舞伎は商業演劇として今日迄続いて来た。人形がやっていたものを人間がやることになったのである。

5、幕末から明治にかけての我国の内外の状況について

1840年から42年にかけて中国では、阿片戦争が行われていた。イギリスの無謀な中国人への阿片売却によることが原因であった。結果は、イギリスが勝ち、南京条約で香港が英領となる。坂本龍馬は、日本は、しっかりと国家を作り、他国からの侵略を防がなければならないと日本の国内を東奔西走した。徳川の篤姫様の時代、ヨーロッパの列強が我国に開国をせまり、軍艦をさしむける。米国は、ペリー(1794～1858)が軍艦4隻で我国に押しかけてくる。1853年のこと！前年11月に来国のノーフォークを出発、長いことかかって浦賀沖に碇泊した。

ペリー来日の折に、狂歌がよまれたという。「泰平の眠りをさます上喜撰、たった四杯で夜もねむれず」これは俚謡としても歌われたという。喜撰というのは当時の銘茶で、上はそのよいものであり、多くを飲むとねむれなくなったようである。狂歌は国学を学ぶ青年達のあそびといわれていた。

ペリーは、のちに病気になり1854年に香港から船便で本国に帰っている。幕府は、外交にせわしくなる。13代家定、14代家茂、15代慶喜と将軍がどんどん変わって行く。1867年、慶喜は大政を奉還し、一市民となる。

一次は参考迄に書いておく—

徳川幕府は西洋式軍隊にきりかえ、フランスから軍事顧問団をよんでいる。

1854年、もう一度ペリー来航、開港となる。

軍艦9隻と数も増えている。箱館にも来た。

1856年、ハリス米国公史が下田へやってくる。

1860年、幕府は咸臨丸(砲12門付)をオランダに発注する。海軍奉行は勝海舟、この年には、井伊大老が暗殺された。勝は長崎で操船術を身につけた。太平洋を死にものぐるいで横断し、サンフランシスコへ行きハワイに戻る。約一ヶ月の船旅であったという。

1866年、14代将軍家茂、大坂城内にて死す。

1867年、フランスから軍事顧問到着、徳川の軍隊にいろいろと軍事教練をほどこす。

1868年、戊辰の年、戦争多発、慶応4年は8月迄、9月から明治が始まる。戊辰戦争は次の年の箱館戦争で終結する。明治政府が動き出し、毎日のように社会に変革がおきて行く。西洋音楽の導入への足がかりも出来てくる。

19世紀の終わりには、列強は帝国主義をとり東洋への進出を図る。我国はきわどいところで国家を形成し、近代化をはかったことになる。当時の各国の首長を次にかかげる。

ロシア	－	アレクサンドル二世
オーストリア	－	フランツ・ヨーゼフ一世
アメリカ	－	リンカーン
ドイツ	－	ヴィルヘルム一世
イギリス	－	ヴィクトリア女王
フランス	－	ナポレオン三世
イタリア	－	ヴィットリオ・エマヌエル二世

彼等はたんとんと東洋をねらっていたのである。

19世紀のヨーロッパの作曲家達をあげておく。後期ロマン派の作曲家、明治と時期が一致している。

ヨハン・シュトラウス／ブラームス／ドボルザーク／ブルックナー／マーラー／ビゼー

19世紀前半の作曲家達

ベートーヴェン／シューベルト／ウエーバー／ベルリオーズ／メンデルスゾーン／シューマン／リスト／ショパン／ワーグナー

1868年以降の我国は、こういった情勢の中で西洋文化の輸入の早期実現を行っていったのである。

6、日本の旋法と音階について

西洋では、長い時間をかけて長音階、短音階、半音階を明確にし、和声法も18世紀の初めには出来上った。和声学はフランスのラモーが確立したもので、今日も有効に使用されている。

我国は、中国からの五音階を使用してきた。雅楽からの音階である。

呂^{リョ}旋法—今日の我国の歌謡曲につながる。

Do、Re、Mi、Sol、La

律^{リツ}旋法—日本の国歌はこの音階で出来ている。

我国の独特な旋法として「律」をくずした「陰旋法」又は都節がある。上品なひびきを持つもので、日本の古典曲は、この音階でなければ意味はないだろう。

俗楽の音階として次の二つをあげておく。

陽旋法—民謡調（呂旋法を律にしたもの）

陰旋法—箏曲、長唄、端唄など

呂旋法は西洋の長音階に通じ、陰旋法は短音階に似ている。このことは明治期の西洋音楽の導入を容易にしたのではないか。

「付け足し」

日本の音階については今のところ確たる資料はない。一応の私見だが、中国からの呂旋を律の形に直して陽旋法として、民謡などは作られていったのではないか。誰がそうしたのは、分からないが、それを又、改良して陰旋を作ったように思う。この旋法は、都節ともよんで、いわゆる町方の音楽になっていった。

要するに、俗楽の音階の基本は中国の呂旋だが、日本で、これを律にしたり陰旋にしたようである。沖縄の独特の五音階は又、別のものである。ただ、中国の呂旋法はそのまま使われていたようである。

○ 陰旋法による楽曲

「六段の調べ」（17世紀）八橋検校作曲

西洋の Bach 以前に器楽曲として主題と変奏が作られたということは大したことであった。

明治 31 年作曲の滝廉太郎の「荒城の月」ロ短調は、西洋作曲法での作品だが、その本体は陰旋法によるものである。山田耕筰があとから手を加えたということのようだが、作曲当時は伴奏なしの単旋律であったということである。

西洋音楽導入後の音階

明治 38 年、田中穂積（佐世保海兵団の軍楽隊長）は、佐世保の女学校の校長にたのまれて女学生の為の唱歌「美しき天然」を作曲した。ハ短調 3/4 拍子の楽曲である。作詩は武島羽衣である。大正 6 年、添田唾蟬坊作詞作曲「のんき節」、これは、律旋法によっている。(1917 年) 大正 7 年、宵待草、竹久夢二作詞、^{オオノタダスケ}多忠亮作曲、多はバイオリン演奏者とのこと、自分の演奏の為の作品としたようである。ハ短調 6/8 拍子、もうれつに音域の広い歌である。

沖縄には独特な音階が生まれている。17 世紀の初め、琉球は島津に征服されていた。呂旋法は中国とのつながりが入って来たもの。この楽曲として石垣島の竹富島で^{アザトヤ}安里屋ユンタが作られている。詞はいろいろで確定的ではないとのこと。独特な音階のものとして、^{タンチャメ}谷茶前の浜をあげておく。歌詞は沖縄のもの日本語がまざりあっている。

沖縄には中国の福建省から^{サンシン}三線が入ってきたが、^{ジャビセン}蛇皮線に作りかえられ、今日も十分に使用されている。撥ではなく^{つめ}つめでひっかいて音を出すのである。共鳴胴に張っている皮が錦蛇のものであるところが面白い。湿気の多い地方にはぴったりなのだろう。

旋法、音階がなければ基本的にメロディーは生まれないのだが、それを意識せずに、感賞的にメロディーは作り出せるのである。出来たあとにやっぱりちゃんとした音階があったことが分かるのだが、音感性というものは不思議なものではある。体で音階を感じとっているところが音楽の面白さか。それにしても、音階については、音楽に携わる者は、しっかりと把握しておかなければならないのである。

譜例集

沖縄で使われた音階

呂旋法（リョせんぼう）

楽曲の例「^{アザトヤ}安里屋ユンタ」（譜例 1）

いろいろな歌詞があるようである。

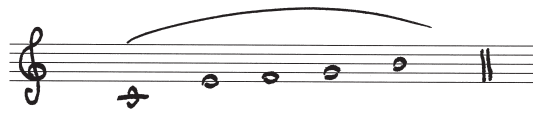
譜例 1



譜例の意味と歌詞の意味

沖縄の独自の音階と楽曲の例
独自の音階（譜例2）

譜例 2



「^{タンチャメ}谷茶前^{ハマ}の浜」(譜例2)

譜例 2

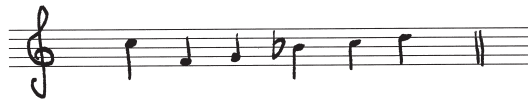
歌詞の意味

あゝ、それはよいことだ 姉さん、いそいで行こう 谷茶前の浜に 小魚の「スルル」が寄ってきたぞ〜
〜 それはよいことだ

中国の音階（譜例3）

譜例 3

律音階（リツ）



呂音階（リョ）



日本で使用した音階

律旋法（リツせんぼう）(譜例4)

譜例 4



我国の国家「君が代」は上の律旋法で出来ている。較べてみるとよい。(譜例5)

譜例 5

君が代

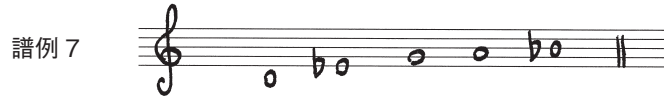
古歌 林 宏守 作曲

陽旋法（譜例6）

譜例 6



陰旋法（都節）律を変化させたもの。西洋の短音階ではないが似たところはある。（譜例7）



7、西洋音楽の我国への導入について（我国の音楽教育の方向）

いわゆる邦楽は西洋音楽導入後もそのまま続けられて今日を迎えている。明治政府は、それとは別に音楽教育を実施して行くことになる。今迄のものに継ぎ木をするのではなく、一つぶの種をまいてそれを育てて行くのである。今日の我国での西洋音楽の隆盛は、この明治政府の近代化政策によるものなのである。

西洋音楽導入の立役者は伊沢修二である。伊沢（1851～1917）は信濃の国の出身、1866年、高遠藩の鼓笛隊の班長となる。この鼓笛隊は幕末には、各藩に存在していたという。西洋の軍楽隊を見習ったのである。幕末当時、大名諸侯は300を数え、鼓笛隊も相当数あったようである。

第13代将軍家定は、徳川の世はもう無くなるというように理解していたようである。欧州の列強は皆、日本へ向けてやって来ていた。海軍は船に軍楽隊を乗せてやって来た。この軍楽隊には、儀式用として鼓笛隊が編成出来るように隊員が配置されていた。横笛と小太鼓多数、大太鼓一つで一隊である。

さて、伊沢は1870年、高遠藩の特待生として、東京の大学南校に学ぶ。1872年、文部省に入る。1874年、愛知県師範学校校長、1876年、7月師範学の研修の為にボストンへ留学することになる。出発は明治9年、1878年（明治11年）4月帰国、それに先立ち、音楽取調の事業に着手すべきと見込書を文部大臣宛に出していた。

1879年（明治12年3月）に音楽伝習所設置案を作る。10月に文部省内に音楽取調掛が出来上がり、伊沢が御用掛となる。健全な楽曲を子供達に与えることを目的とした。又、国歌の創成を期待したのである。国歌としては、歌の世界で多くが作られていった。

伊沢はボストン留学の間にボストン大学のメーソン（Mason）という唱歌教育の権威に出会い、個人的に音楽についての授業をうけた。明治政府はこのメーソンを明治13年の春に呼びよせ、ここに我国の本格的な音楽教育が始まる。文部省は音楽取調所を文部省に作り、伝習生を募集して、彼等を先ず音楽教員とする。1880年9月の入学、22名が伝習生となった。ここは、明治20年から東京音楽学校として再発足し、多くの作曲家達も出来上っていった。

メーソンが来て明治14年から17年にかけて小学唱歌の編纂が行われている。メーソンの帰国後も行われていたことになる。楽曲の選定、教材の作成などである。

取調所での教科内容は楽典、和声学、鍵盤、バイオリン、琴、声楽、英語、その他、聴音、写譜、音楽史といったもので、毎日びっしりと授業はつまっていた。国歌の制定にはメーソンはかかわっていない。明治13年10月、海軍軍楽隊の教師、ドイツ人のエッケルトが国歌のメロディーに和音の伴奏を付け、吹奏楽用に編曲したものが採用された。

楽典は、メーソンが持ってきたのだろう。J・Curryのものを内田弥一（元旗本）が翻訳している。明治21年には中学校や師範学校で教科書に使われている。値段は当時、29銭であった。

日本の民謡は、長いこと学校教育の中では扱われてこなかった。1945年以降G.H.Q（米軍総司令部）の命令で我国の教科書に少しづつ入るようになった。本当は明治時代からとり扱うべきだったのであ

るが、唱歌としては無理だったのだろう。

江戸時代には明、清楽、つまり中国の音楽が多数行われていたという。明治の初めには全国的に広がっていった。楽器は月琴が使われていたが、日清戦争（明治 27、8 年）の後に、影をひそめた。しかし、これらの楽曲のメロディーが転化して我国の流行歌に残ったものが沢山あるという。明治の初めには、作曲者の分からない歌が沢山あったという。どのようにして日本中に広がって行ったのだろう。とにかく、それらはよく歌われていたようである。軍歌「宮さん宮さん」は有栖川の宮のことだろう。官軍が江戸ぜめの時に、兵隊達がうたったものだという。品川弥二郎作詞、大村益次郎作曲である。その他、「ノーエ節」「書生節」「お江戸日本橋」熊本県民謡「^タ田原坂」などが歌われていた。これは、明治 10 年 2 月、17 日間の戦いで、西郷隆盛と官軍が対峙したが、この時の様を歌にしたものである。明治 11 年には「梅が枝の手水鉢」^{チヨウスバチ}がうたわれた。この年、大久保利通が暗殺される。この時期は、突然の西洋音楽輸入でそちらの道を進む者達と、従来からの日本の音楽をやる者達と二つのグループ？が我国の音楽をおしすすめていったのである。

篤姫は大奥を清算して江戸城を出る。徳川家から月 25 円をもらって生活したという。とにかく江戸からは火の手が上がらず、無事に政権交替が行われたのである。一方、いさましい者達もいた。榎本武揚は幕府の軍艦 8 隻をひきつれ、箱館にたてこもる。そのうちの一隻開陽丸は江差沖で沈没する。榎本は官軍にとらえられるが、開拓使の黒田清隆に助けられて明治政府の高官となる。人材は明治政府に必要であったのである。榎本は海軍卿や陸軍卿を歴任する。又、幕府の勝海舟も、政府の役人にとりたてられた。

明治 5 年、学制令が發布される。小学校を作って子どもを学校へというのだが、授業料もとり、なかなかうまく行かなかったようである。授業料といえば、昭和 14 年迄は小学校で授業料はとっていたように思う。明治期、学校教育の中に唱歌の授業はあることになっていたが、当分これを欠くということではなかなか実施されなかったようである。

伊沢に話しをもどそう。伊沢は音楽教科について、こんな風にいつている。

- 1、子供の精神、気性をさわやかにする。
- 2、勉学の疲労を解消する。
- 3、歌を歌うことで肺を強くする。
- 4、正しい言葉の発音が可能になる。
- 5、鋭敏な聴力を養う。
- 6、思考力が出来てくる。
- 7、心情を深く楽しませる。
- 8、善良な性格を作り出せる。
- 9、欧米では音楽は教育の一課目になっている。

明治政府はこのことをふまえて西洋音楽を我国に導入しようとしたのである。古代ギリシアでは青少年の育成に体育と音楽は欠かすことは出来ないとしてやっていた。さて、歌うことだが、歌詞の内容など長唄、端唄、小唄などは大人の世界で作られたもの、小学校で歌うのには無理がある。ちゃんとした唱歌をしっかりと歌わせることがのぞましいとされたのである。国楽の創成は急務であった。国楽はもっぱら歌の世界で出来上がっていったのである。伊沢は、紀元節の歌を作曲している。1888 年、明治 22 年の作品で、作詞は高崎正風である。

明治30年以後、男社会の中に女学校が出来て来た。良妻賢母の育成である。それから上というとは津田梅子の英学塾があった。以前にも書いたが、「美しき天然」という名曲が明治38年の10月に出来ている。これは佐世保の女学校の生徒の為に作られたものである。西洋からワルツが日本へ入って来た影響で3/4拍子で作られている。

サーカスは明治25年には出来ていたという。35年には西洋風なものになり、空中曲芸の為にネットなども持つようになっていた。楽隊もあって演奏もやっていた。美しき天然は、多少哀愁的であり、悲壮味のある空中ブランコにぴったりの曲であった。女学生の愛唱歌がサーカスに使われるようになったというのも面白い。ワルツのスピードとブランコの動きが丁度良かったのである。ジンタということで日本中にひろがったが、シンバルの音と大太鼓の音の組み合わせがジンタッタという音に聴こえ、その様な言葉が出来たと思う。

又、この曲は軍楽隊でも愛唱され、楽譜も後に出版されている。「空にさえずる鳥の声、峯よりおつる滝の音。大波小波トウトウ鞆と、響き絶えせぬ海の音。」一番の歌詞はまだ長々と続いて行く。詞の半分で一曲にしてあるところが面白い。

滝 廉太郎のこと（明治12年－36年）

大分県出身、明治27年東京音楽学校へ入学、31年卒業助手となる。その年に「荒城の月」を作曲する。無伴奏、土井晩翠バンズイ作詞。滝は中学校の生徒の為に唱歌の懸賞応募に当選したのである。口短調で書かれたが、本体は陰旋法（平調子）的に思える。日本人にしみ込んだ音感性での作品ではないか。この他、「箱根八里」もえらばれている。中学唱歌集は、東京音楽学校の発行である。滝は、明治31年6月にドイツへの留学を命ぜられ、明治32年4月にドイツにむけて出発する。ライプチヒへ行ったがワーグナーに会えたのかどうか。彼は、ライプチヒで肺結核におかされ、2ヶ月で日本へ戻ってくる。24歳と11ヶ月で死亡。彼は病気の中で幼稚園の唱歌を作っている。明治34年7月編集、ピアノの伴奏付きで、これは、滝の2年上の東京音楽学校を明治29年に卒業した東くめヒガンという府立第一高等女学校の教諭にたのまれてやりだしたことである。たまたま、彼女の夫が東京女高師の教授で、ここには、幼稚園があった。唱歌は、言文一致のもので、東くめの詞も多くあり、結局、滝の作品も多くなったようである。滝の歌は、詞とメロディーがよく合わさっていて、我国のあたらしい音楽になっていった。彼は、東西二洋の音楽を折衷して国楽を創成してもらいたいと期待した伊沢に応えたのである。

明治38年には「戦友」という軍歌が作られている。京都の小学校の先生真下飛泉の作詞、三善和気の作曲のものである。言文一致の叙事唱歌といわれていた。関西地方の少年少女達に歌われていたという。明治43年頃に演歌師がひろめた。日露戦争の軍歌としてこれが残ったという。「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の、赤い夕日にてらされて、友は野末の石の下。」このあと長々と歌詞は続いて行く。私は、この歌のはじめの方しか歌っていない。

参考1

- 明治生まれの詩人（昭和迄活躍した）
野口 雨情（1882～1945）
サトウ・ハチロー（1903～1973）
- 明治生まれの作曲家

中山 晋平 (1887 ~ 1952)
本居 長世 (1885 ~ 1945)
佐々木 すぐる (1892 ~ 1966)
弘田 龍太郎 (1892 ~ 1952)
杉山 長谷夫 (1889 ~ 1952)
梁田 貞 (1885 ~ 1959)
河村 光陽 (1897 ~ 1946)
海沼 実 (1909 ~ 1971)

参考2

明治37年から38年にかけて、多くの音楽に関する印刷物が刊行されだした。西洋音楽の組織についてのものである。音階、和声学、対位法、作曲法、形式論、楽曲解説、音楽史、音楽雑誌、評論などである。

8、蓄音器とレコードについて

蓄音器は音楽の普及にはなくてはならなかった機材である。明治40年頃から、アメリカのレコードが輸入されている(1907年)。我国でも、日米蓄音器株式会社が設立された。このあと、この会社は日本コロムビアとなる。

蓄音器は四角い箱型で、手でゼンマイを巻いてレコードを乗せる盤をまわす。ラップで音を拡声して聴くことになる。ポータブル型も出来たが、これは持ち歩いて野外でレコードを聴くのである。サウンドボックスに金属の針をつけ、レコードの溝におとす。サウンドボックスが音を拡大する。音楽の普及は放送局(大正のおわりから昭和の初めにかけて中央局が出来た)が出来たのは、この機械が音楽普及の主役であったのである。

明治10年(1877年)エディソン(米国)がロウ管の蓄音器を発明する。今の録音器のようなもの。明治20年(1887年)これは、蓄音器と円盤(ディスク)にかわる。明治42年(1909年)、ドイツで管弦楽曲のレコードが出来た。1924年、マイクロフォンの吹き込み、1分間78回転のSPが出来た。1948年、ビニール製のレコードが作られ、LP、33回転、45回転のものが作成されるようになった。西洋音楽がレコードで日本へ入ったのは、明治32年頃からで、蓄音器もレコードもよく売れたようである。

日本初のレコード会社は1907年に作られた。外国資本によるものである。大正4年には、ニッポノフォンという会社が出来た。欧米のレコード会社コロムビア、ビクター、ポリドール、テレフンケンが、日本に出張録音を行っている。もっぱら邦楽を吹き込んだようである。原盤を本国に持ち帰り、レコードに作って輸出したのである。ジャズは1916年から流行した。レコードも1917年には作り出されている。大正時代のレコード会社設立は、大正2年に東京蓄音器会社、9年には日東蓄音器会社、10年には帝国蓄音器会社であった。これらの会社は、西洋から原盤を輸入して、日本でレコードにこしらえて販売したのである。我国には大正の末期から昭和の初めにかけては、まだ独自のレコード会社は出来ていない。外国の会社との提携によって成立していたのである。コロムビア、ビクター、ポリドール、キングなどの会社名があった。安価なレコードを販売することで、西洋音楽はどんどん

普及していった。赤ラベルのレコードが売り出され、これは管弦楽曲が吹き込まれており、大曲も知られていった。スコア迄付けられていたのである。

19世紀の終わりは、ヨーロッパ各国は帝国主義をとり、東洋への進出もはげしくなる。それとは別に、第一次世界大戦がおこり、ヨーロッパからそこで演奏の出来なくなった著名な演奏家達が我国へやって来た。かくて、西洋音楽はいやがうえにも我国にひろまっていったのである。

参考3

大正13年には、ビクターがベートーヴェンの第9交響曲をレコードにして売り出した。外国での製作である。レコードには赤ラベルがはられていた。

9、童謡から歌謡曲へ

詩作がなければ歌は出来ない。詩人野口雨情は遺稿（昭和30年代のもの）に、石川啄木の作品はどれも深味にかけると書いた。石川は若すぎたといったのである。雨情は書く。韻文は散文ではない。散文は、いわんとすることを細大もらさず言いつくす。思うことを細々と並べつくす。韻文は、ヒントばかりで捉えどころがない。浅いのか？しかし、この浅さに深さがある。散文ばかり書いてると、韻文が分からなくなる。野口は石川を札幌の北門新聞社に紹介した人で、当時、小樽新聞につとめていた。童謡の出来て来方が面白い。文部省唱歌は面白くないというのである。作曲家中山晋平の名前を先ずあげておく。彼は、童謡だけを作った作曲家ではない。例えば、大正時代に島村抱月が主宰していた芸術座がトルストイの「復活」を上演したが、その中では中山の作曲したカチューシャが歌われていた。作詞は島村抱月である。

中山晋平（1887年—1952年）

1912年（大正元年）東京音楽学校卒業、浅草小学校の音楽教師となり65歳でこの世を去る。童謡作曲家として有名になった。野口雨情の「シャボン玉」に曲をつけている。

フランスのジャン・ジャック・ルソーが作曲をやっていたことは案外知られていない。むすんで、ひらいてのメロディーは彼の作品である。我国では「見渡せば青柳、花ざくらこきませで〜〜〜」という歌詞がつけられ、明治時代から歌われていたという。音楽取調掛の職員、柴田清熙^{テル}がこの詞をつけたというから、当時の人達というのは、たいしたものだったと思う。子供の為の詞となると、これはどうなのかということは残るだろう。

鈴木 三重吉のこと（1882年—1936年）

広島県出身、童話作家、東京帝大英文科卒、在学中（1906年明治39年）夏目漱石^{ソウセキ}の紹介で、「千鳥」がホトトギスにのることになる。大正になって子供の為の作品を作り出す。外国童話の翻案を多く残した。大正7年（1918年）鈴木が主宰して児童文学雑誌「赤い鳥」を創刊する。子供の為によい文学を与える目的で作ったものである。音楽として「童謡」が作られていった。北原白秋、西条八十らが詩作する。大正8年から楽譜の形でこれらの童謡が雑誌にのるようになる。この当時、作曲家も多く出るようになって来たが、成田為三、弘田龍太郎、山田耕筰等は歌謡曲風というより、いわゆるリート（芸術歌曲）を作曲する方向で動いていた。楽譜のことをいえば、大正7年の「宵待草」も楽譜が出版されたのである。バイオリニストの作った曲だが、曲のはじめから突然にオクターブの跳躍（ソからソ）でハ短調6/8拍子のゆっくりとした名調子も、歌える人は少なかったのではないか。私は、

どのようにしてこの歌を知ったのか記憶にはない。ラジオにはよく使われていたのだろうか。

今日、カラオケというのが流行っているし、売れてもいるようである。過去には、歌手はバンドやオーケストラと一緒に歌って録音するのが普通であったが、歌をはっきり浮き出させる為には、同じスタジオの中でやるのはなかなかむずかしいのである。結局、伴奏部分を先どりして、それに歌手が合わせて一つのものにするという方法がとられるようになり、この伴奏の部分に歌がないので、カラオケのオーケストラというようになった。ステージとオーケストラとが一緒にやるといったオペラのようなものはこのカラオケは出来ないのである。もっとも、テープに合わせてお芝居をとというのは出来る。又、ステージでカラオケに合わせて歌うというのものにも問題はない。一般大衆が、この生のオーケストラとステージで歌いたいという願いがあって、カラオケを代用することが今日の一つのやり方にはなったのであるが、本当は、生のオーケストラとやるのが本筋なのである。歌謡曲を単にピアノの伴奏だけで歌うのも味けないのである。オーケストラの、バンドの音色が、歌を支えるのである。

話しはとぶが、その昔、ワーグナーは、コンセルバトワールを作った時に、歌を一生懸命にやらせろといったようである。オペラには歌手がいなくてはならない。ワーグナーの助手ビュールネルは劇場の合唱指導者であったが、Chor Übungen を編纂して、固定 Do、移動 Do 唱法を歌い手に指導した。この本は歌をめざす者にとって今日も有用である。歌謡曲をやる人達も、この本を勉強すべきだろう。

明治政府の唱歌の作曲については、作詞者名、作曲家名をあらわすことがなかった。どのような理由なのかは私には分からない。文部省唱歌は今日も歌われている。今日は、著作権、版權は確実に保護されている。当時は何だかよく分からなかったのだろう。

戦後（昭和 20 年 8 月 15 日以降）ビクターの楽譜が 10 円で出版され、売られていた。ピースものといって、一枚のうすい紙に印刷され三つ折にされていたが、当時として高かったのか安かったのかは分からない。1947 年、昭和 22 年に東辰三^{アスマツツウ}作詞作曲の「港が見える丘」のピースが発売されている。唄は平野愛子、ブルース調のけだるい気分の歌で、なかなかよいと思っていたが、なにか、あっさりと消えてしまった。このピースには略譜、つまり、数字譜が印刷されていて、これはハーモニカの為ということであった。ハーモニカは明治の日露戦争後にドイツから大量に入ってきて、大正、昭和と日本に広まっていった楽器である。ハーモニカ・バンドというのも出来て来たのである。吹奏楽团的なものだと思えば良い。

さて、昭和 3 年（1928 年）「波^ハ浮^フの港」野口雨情作詞、中山晋平作曲がビクターで吹き込まれた。唄は藤原義江で日本初のレコードが出来たのである。よく売れたという。歌謡曲というのは、レコード会社が作り出したものなのである。童謡は子供の為に、歌謡曲は大人の為の小唄であったのである。

レコードの製作というのは、例えば、一曲の歌謡曲を売り出すのに相当の手間がかかるのである。ディレクターがプロデュースして行くのだが、歌手をみつけ、作詞家、作曲者、編曲者、そして、楽団といったものと打ち合わせて録音が行われる。相当な時間が必要だろう。これがヒットするかというとなかなかむずかしい。ディレクターの胃は四角くなるだろう。

私は歌謡曲を伊沢修二の「国楽」として扱っているのだが、著明なところを少し書きだしてみよう。

- 昭和 6 年 丘を越えて
唄 藤山 一郎
 - 昭和 7 年 影を慕いて
唄 藤山 一郎
- | | |
|---|----------|
| (| 島田 芳文 作詞 |
|) | 古賀 政男 作曲 |
| (| 古賀 政男 作詞 |
|) | 〃 作曲 |

- 昭和8年 サーカスの唄
唄 松平 晃 (西条 八十 作詞
古賀 政男 作曲
- 昭和8年 東京音頭
唄 小唄勝太郎 (西条 八十 作詞
中山 晋平 作曲
三島 一声
- 昭和9年 赤城の子守唄
唄 東海林 太郎 (佐藤惣之助 作詞
竹岡 信幸 作曲
- 昭和12年 裏町人生
唄 上原 敏 (島田 馨也 作詞
阿部 武男 作曲
結城 道子
- 昭和13年 支那の夜
唄 渡辺 はま子 (西条 八十 作詞
竹岡 信幸 作曲

作曲家としては、この他、万城目正、服部良一をあげておく。

戦後は、LPレコードが輸入されたが、結構高いものであった。クラシック一枚が3000円から4000円位したのではないか。札幌では、喫茶店でこれを買って客にサービスをしていた。

戦後すぐの歌謡曲が、並木路子の歌った「りんごの唄」だろう。サトウ・ハチロー作詞、万城目正の作曲である。昭和21年の朝日新聞の小説「青い山脈」石坂洋二郎原作が映画になって主題歌が出来る。昭和24年に「青い山脈」西条八十作詞、服部良一作曲の歌は、コロムビアから発売された。藤山一郎と奈良光枝が歌っている。コロムビアは戦災の被害がなく、戦後すぐに立ち上がったという。この歌は青春歌謡としてヒットした。映画の封切り前の出来ごとであったようである。映画の主題歌としては、美空ひばりの「悲しき口笛」藤浦洸作詞、万城目正作曲のものも昭和24年には出て来た。なお、古賀政男は戦前？から歌謡曲作曲家であるが、古賀ギターといって、ギターの普及にも貢献した。

さて、一応この辺でこのレポートを終了する。音楽の分野は広くて網羅することはなかなか出来ない。それぞれの分野に歴史があって、これからも、いろいろな人達によって見方が変えられて行くのだろう。今後に期待する。

10、後記

今日、我国の音楽界は、クラシック、軽音楽、邦楽と、それぞれに一応は成立している。しかし、21世紀、これからどうなっていくのだろう。これからは、多くの人達にいろいろと認識を持ってもらわなければ、「音楽」は成立して行かないのではないか。需要があって一つの芸術が成り立つことを再度書いて、このレポートをとじる。

11、参考資料

- a、日本音楽教育史 供田 武嘉津 音楽之友社 1996-2-20
- b、日本音楽概論 田辺 尚雄 音楽之友社 音楽文庫 32 昭和 36-9-10
- c、定本日本の唱歌 堀内 敬三 実業日本社 昭和 45-8-1
- d、世界大百科事典 初版第四刷発行 平凡社 1959-1-25
- e、歌は時代とともに 野ばら社 2007-8-20

f、朝日百科

日本の歴史 9 (近世から近代へ)

朝日新聞社 1989-4-18

2009年10月24日(土)

於いて 北ノ沢